

30周年 記念大会

# 子育て講演会



2013年(H25年) 6/8(土) 久米小学校体育館

学校法人

## 徳山中央幼稚園

〔 演題 〕

# 憧れと生きる希望を育む子育て

## Profile

汐見 稔幸 (しおみ としゆき)

1947年 大阪府生れ

東京大学教育学部卒、同大学院博士課程修了。  
東京大学大学院 教育学研究科教授を経て、  
07年4月から白梅学園大学教授・副学長。  
10月より学長。  
現在 東京大学名誉教授 白梅学園大学学長

専門は教育学、教育人間学、育児学。育児学や保育学を総合的な人間学と考えていて、ここに少しでも学問の光を注ぎたいと願っている。また教育学を出産、育児を含んだ人間形成の学として人間形成の学として位置づけたいと考えていて、その体系化を与えられた課題と考えている。三人の子どもの育児に関わってきて、その体験から父親の育児参加を呼びかけている。保育者たちと臨床育児・保育研究会を立ち上げ定例の研究会を続けている。

また同会発行のユニークな保育雑誌『エデュカーレ』の責任編集者でもある。

NHK、Eテレ すくすく子育て 出演多数



〔 著 書 〕

『3～6歳 能力を伸ばす 個性を光らせる』2010年(主婦の友社)  
『0～3歳 能力を育てる 好奇心を引き出す』2010年(主婦の友社)  
『子どもが育つお母さんの言葉がけ』2010年(PHP研究所)  
『保育者論』2010年(ミネルヴァ書房、共著)  
『子どもの自尊心と家族』2009年(金子書房)  
『子育てはキレない、あせらない』2009年(講談社文庫)  
『夫婦力』2008年(岩崎書店)  
『「格差社会」を乗り越える子どもの育て方』2008年(主婦の友社)  
『子どもの学力の基本は好奇心です』2008年(旬報社)  
『子どもの身体力の基本は遊びです』2008年(旬報社)  
『子どものコミュニケーションの基本は共感です』2007年(旬報社)  
『乳児保育の基本』2007年(フレーベル館、共著)  
『親だから伸ばせる中高生の「学力」と「生きる力」』2007年(主婦の友社)  
『親子のハッピーコミュニケーション』2007年(岩崎書店)  
『のびのび子育てこんなお母さんなら大丈夫』

クレヨンしんちゃん親子学Ⅱ』2007年(双葉社)

『パパ権宣言』2006年(共著 大月書店)  
『子育てにとても大切な27のヒント―クレヨンしんちゃん親子学』2006年(双葉社)  
『学力を伸ばす家庭のルール』2006年(小学館)  
『子どものサインが読めますか』2005年(女子パウロ会)  
『はじめて出会う 育児の百科』2003年(小学館)

## プログラム

- ◎ 開会の言葉
- ◎ 園長挨拶
- ◎ 来賓挨拶
- ◎ 講師紹介
- 講 演
- ◎ 謝 辞
- ◎ 閉会の言葉

## 『 知識基盤・消費社会をどう生きるか 』

子育て講演会の意味するもの

2013,6,8 園長 御手洗賢成

第1回目の1984年以来、本園の講演会は30年目を迎える。この間、子育てを取り巻く社会状況は、変化の激しい時代の波にさらされグローバル化と競争及び共生というかつて誰も経験したことのない地球時代を突き進んでいる。

この30年を振り返ると、象徴的な言葉が生まれては消え或いは再燃した、バブル崩壊・少子化・不良債権・経営破綻・温暖化・モラルハザード・新自由主義・携帯/ネット・年功序列型賃金、終身雇用制・ホームレス・ホリエモン・振り込め詐欺・ニート/フリーター・非正規雇用・派遣労働・格差社会・ネットカフェ難民・就活・道路特定財源・偽装・格差社会・教育格差・投機マネー・サブプライム・食糧自給率・後期高齢者・リーマンショック・消えた年金・断捨離・コンクリートから人へ・事業仕分け・婚活・妊活・終活・反日デモ・3、11・想定外・絆・復興予算・福島原発事故・官邸前デモ・TPP・再稼働・安全神話・ES細胞・遺伝子検査・IPS細胞・領有権・出生前診断・アベノミクス・改憲論、或いは、ファミコン・いじめ・登校拒否・ひきこもり・透明・心の闇・キレル・17歳・バーチャルリアリティー・学びからの逃走・普通の子ども・自殺・オヤジ狩り・DS・ポケモン・13歳のハローワーク・裏サイト・自己責任・ゆとり教育・学力低下・PISA・児童虐待・育児ストレス・気になる子・自尊感情・脳科学・雑学・スピリチュアル・KY・子どもの最善の利益・尾木ママ・スマホ・フェイスブック・ライン・いじめ自殺・体罰・子どもの貧困・無償化・子育て3法等、枚挙にいとまがない。

こうした中、第1に、1997年の『透明な存在である僕』と発した少年A(現在30歳)の言葉は、常に私の心を離れることはない。あの凄惨な事件は、日本中を震撼させ当初犯人は大人だと予測されていた。折しも、この年の講演会講師は、今、大ブレイク中の、尾木ママこと尾木直樹先生の年であり事件発覚の5月24日から逮捕された6月28日の間だった6月21日に開催されたものであった。自分のことを酒鬼薔薇聖斗と呼び、事件現場で被害者J君の頭部を切断後自宅の風呂場の天井に隠し、夜中に学校の校門に運んだという事件だった。今なお、何が当時14歳の中学生だった少年Aの動機(きっかけとは異なる)となったのかは現在も明確になっておらず、日本社会に残された病理の1つであるといえる。(参考文献 子どもの攻撃性に潜むメッセージ)

第2に、日本は『消費大国』社会を一層拡大しつつあるということである。自国で生産可能な食料をも(自給率40%)他国から大量に買いつけ消費し、他方で賞味期限切れの食材を大量に廃棄している国である。又、本講演会と同じ歴史をもつあるテーマパークは、面白さと非日常をお金で買う消費社会の縮図の1つでもある。消費社会は、物や人や事柄までも商品化し消費していく社会のことである。物は、必要だから買う時代から欲しいから買う時代へと肥大化し、付加価値合戦を続けている。人は、終身雇用制と年功序列型賃金という日本社会の高度成長期から続いた体系が崩れ、流動化と格差の中、勝ち組負け組なる競争を煽られ人が商品としての扱いされてもいる(市場化テスト)。物と人を繋ぐ事柄は、サービスという本来なら崇高な意味合いをもち得た概念から商品化(金銭化)され、応能負担から応益負担への道を突き進み富をもつ人ともてぬ人との格差を拡大している。又、面白さを買わせる商品化は、子どものあそび文化にとどまらず世代を超えた大人をも巻き込み割幸心をあおり、日常の仕事や生活で抱え込んだいいようのない不全感の潜在化を解消する手だてとしての様相を日常化し

ている。さらに、極めつけとしてのネットオークション\*)にみられる物や人や事柄の商品化は、消費社会を象徴し、市場原理という矢で貫かれている。\*)道路・消防車販売・結婚式代理出席等々)

第3は、人々の繋がり方がネット社会(検索エンジン・SNS等)により予測不可能な様相を示しつつ、地球時代を意味する爆発的広がりをもたらした。特定と匿名・組織と個別・時差と即時・点と面・知識蓄積と検索・多様と個・一方向と双方向・問いと答えの距離・身近な知人と見知らぬ共感者・本当と嘘・情報操作とセキュリティ等、人物事の繋がり方への正、負の変化をもたらした。

第4は、3・11に象徴される気候地殻変動は、私たちの依って立つ大地が常に危うさの上に立っていることを知らしめ、私たちの行き過ぎた欲望の暴発に大きな楔を打ち込み立ち止まることを余儀なくした。それであってもこの国は、数十年前からの原発問題を含む負の遺産から目をそむけ、まるで何もなかったかの如く振る舞おうとする姿勢を今も続けている。

第5は、先に掲げたキーワードに凝縮された子どもを取り巻く諸問題が、社会の発展と変化に呼応する形で表面化してきた。この背景の1つに、学校教育では『あるべき自分』を求められる一方、隣り合わせる消費社会では『あるがままに欲望を暴発させる仕掛けに組み込まれた自分』とのダブルバインドを感じながらの軌轢が、歪さとなって現れたと考えられる。

本講演会は、こうした変化の激しい社会の現状を深く捉えつつそこに立つ、親と幼稚園を含む教育機関や、地域住民とが子どもとどう向き合ったらいいのかという『関係論と意味論』を問い続けてきた。掲げた演題は、そうした時代を読み取ろうとする『過去と今とを結ぶ未来』へのメッセージとしての意味をもつ大きな意義があったと考える。

こうした意味からも、今回掲げた『憧れと生きる希望の子育てとは』と題する講演会への願いは2つである。1つは、学校に行かずとも大人になれた時代から行かなくては大人として働き生きていくことのできぬ社会への変遷は、知識基盤社会であると同時に、多様な価値と異質性が自由に表明されつつ同じ地球船で生きねばならぬ運命共同体である両義においてグローバル化と持続可能性を乗り越えねばならない。そして、高度成長期の様な我慢して勉強すれば良き職業或いは幸せがつかめる時代は去り、必ずしもその企業が生き残れるとはいえぬ時代へと移り、いつ路頭に迷うやもしれぬすべり台社会になってきた。だからこそ、一度や二度ころんでも立ち上げられる自分づくりのための、憧れ(知的・感性的・身体的好奇心)を軸とした動機付け・意欲を原動力とし、教科書で学ぶ知識を記憶していく学習内容から、状況を分析し論理的に他者に説明し、情報を批判的に捉える能力。或いは、多様な知識をつなぎ合わせ問題解決に導く学習内容を源とした方向付けを、教育機関・親・地域社会がどう意味付け具体化していくかが、深く求められる2つには、その憧れをもって生きようとする過程には、必ずといっていいほどのためらい・辛さ・怒り・面白み・楽しみなど葛藤と躍動が伴う。対象に関わろうとするからこそ生じるその心の揺れを、あなたはあなたであって大丈夫だと応援してくれる『誰かの存在』なくして前に進めない。これが、生きる希望の礎となり未来を切り開く鍵となる。子どもを育てることは、『未来という希望の光を育む』営みでありこのバトンを渡さることが、私たち大人の責任である。この社会実現のために私達は、『憧れと生きる希望』を持つことの意味を問い続け、『希望の灯火』を消さぬ直向さと、予測できない事態が起きてても、様々な人々と協調しながら創造的な解決方法を見いだしていける人なりを育てていかなければならない。本園は、幼児期を生きることも達し、『対話的人格形成』という理念を掲げ、その民主的感性的土壌を培うべく地域の子育てセンターとしての役割を今後とも果たしていきたい。



※ 大学時代見た映画、「どぶ川学級」のモデルであった須長先生のことが深く心に残っていた。先生の著書を『子育て講座』を読み込む内に是非と考え、出版者へ連絡し、ご自宅へ電話したことを思い出す。前日、食事をさせていただきながら、当時テレビ出演されていた『江守モーニングショー』のこともお話しされ我が子のいじめの問題も絡め『いじめ問題』について語り合ったことを憶えている。

※ 当時、早期教育のことが話題になっていた時期「かしこさ」について宮城で講演される汐見先生のことを、ある雑誌で知った。当時、およびする先生の本とは異なる話ぶりがきになったため、主催者に、大胆にも講演の記録テープがあれば譲って欲しいとの電話をかけた。今では、考えられないが、主催者から早速の送付の約束を頂いた。聴講後、まもなく出版社を通じ先生の自宅へおそるおそるお電話をし、おいで頂くことを確約され有頂天になったことを憶えている。ただ、講演前日羽田からの飛行機が荒れた天候のため決行となり先生は、

### 盛況の子育て講演会

徳山中央幼稚園 須長さんの話に聞き入る

第4回



熱心に聞き入るお母さんたち

須長さんは放任も過保護も、御手洗も子育てから遠いもので、責任は誰かに追いついて済まないと、過保護も成長がでないまま欲求不満を生むと説いたため、いっしょにいたいという愛を、与え、人間を与えようとした。須長さんは共働きの二男の受けた、いじめの体験を述べて、子供の奥底をつかみ、内面から指導することの大切さを説明したが、今は物が豊かになりすぎて、欲求がすぐ満たされる状態。これが子供を育てる二次条件である「生活」と「人間関係」を省略させているので、子育ての上でぜひ補ってほしいと訴えて、お母さんたちの拍手を浴びていた。



御手洗 賢成さん(33)

### 子育て講演会が五回目

徳山中央幼稚園長

徳山中央幼稚園が主催する「子育て講演会」が今年五回目を迎えた。講師は、御手洗賢成さん(33)氏。講演は、十一月十日(日)午後二時から、幼稚園の講堂で行われた。当日は、お母さんたち約五十名が参加された。講演は、御手洗さんの子育ての経験や、子育ての悩み、子育ての楽しみなどについて話された。講演は、お母さんたちの心に響き、大いに好評であった。

### 今日の顔

第5回

※2回目において頂いた秋葉先生に、再度お願しいし快諾を頂いたことで安堵した記憶が、いまでも。研究室への電話のタイミングが良かった。

その日、実家の堺市まで移動され、朝一番の新幹線でお出でいただき冷や冷やしたことを憶えている。その後、今回を入れて7回もお呼びすることになるとは予想だにできなかった。又、お渡しした記念の花束を、宅配便で送って下さいとのことを申し出られ、夫婦愛の深さを感じた。



熱心に聴講するお母さんたち

「かしこさ」とは...ムにとどつと

徳山中央幼稚園 子育て講演会熱心に

「かしこさ」ってなんだろーをテーマに徳山市城ヶ丘の徳山中央幼稚園(御手洗賢成園長)と同保護者会(三原佳子会長)主催の第七回子育て講演会が十六日、久米小体育館で開かれ、幼児を持つお母さんを中心とした二百八十人が講師の汐見幸東大教育学部助教授の説く「人間的に

「かしこく」生きるとは何かについて熱心に聞き入った。この子育て講演会は毎年一回、同幼稚園が広く地域に開放しているもので、大きな突

りをもたらしている。汐見さんはまず日本の子供たちは世界で一番勉強時間が長く、成績もいいのに、成長して人間的にかしこく生きていくには、いかに生活に必要ないことも多いことを東大生の例などから説明。さらに知識を詰め込むだけでは生活に生きる知恵とならず、人間らしいかしこさにつながる。人間らしい自分を問題にぶちあたらないと、大事なことにあたる人間らしい優しさや勇気をもつて、心や、また非人間的なものを許さない人間、自分の間違いを素直に認める勇気を持つ人間に育ててやっつけてほしいと話した。また、これらは親自身がいかに人間らしい生活を送るか、私たち大人がうつつけられている問題だとうつつ

大きな感動を導き出す

「かしこく」生きるとは何かについて熱心に聞き入った。この子育て講演会は毎年一回、同幼稚園が広く地域に開放しているもので、大きな突

りをもたらしている。汐見さんはまず日本の子供たちは世界で一番勉強時間が長く、成績もいいのに、成長して人間的にかしこく生きていくには、いかに生活に必要ないことも多いことを東大生の例などから説明。さらに知識を詰め込むだけでは生活に生きる知恵とならず、人間らしいかしこさにつながる。人間らしい自分を問題にぶちあたらないと、大事なことにあたる人間らしい優しさや勇気をもつて、心や、また非人間的なものを許さない人間、自分の間違いを素直に認める勇気を持つ人間に育ててやっつけてほしいと話した。また、これらは親自身がいかに人間らしい生活を送るか、私たち大人がうつつけられている問題だとうつつ

大きな感動を導き出す





第15回

対人関係 運動 言語  
三つの能力を伸ばせ

大阪教育大副学長が力説

徳山中央幼稚園(徳山)で開かれた講演会。講演者(左)は大阪教育大副学長、徳山中央幼稚園長(右)は徳山中央幼稚園長。講演会には、徳山中央幼稚園の園児や保護者、地域の関係者など約100人が参加した。

※ 10回記念大会の際、15回のお約束をさせていただいていた。先生の話術は、臨場感と高揚感を合わせたものであり大阪の藤山寛美の演劇で学んだとお話を頂いた。又、第10回の時の講演後の懇談で、当時の私に「張りつめた糸は切れやすい」の苦言を呈していただいたことを今も感謝している。現在、大阪の短大の学長をされている。子どもを愛している つもり

第19回

徳山で子育て講演会

子供の暴発に深い考察

村山大東文化大教授が指摘



講演する村山さん

●徳山●徳山中央幼稚園の子育て講演会が十五日、徳山中央幼稚園(徳山)で開かれた。久米小体育館で開かれた講演会には、徳山中央幼稚園の園児や保護者、地域の関係者など約100人が参加した。

「暴発する子どもの人間力」をテーマとした講演会が、徳山中央幼稚園で開かれた。村山教授は、八〇年代初期に全国で起きた校舎内での児童に対する反発や抵抗、理由不明で子供たちも健康的だったと強暴発する理由の一つである。それが九〇年代に入ると勢力を伸ばす子供を指摘した。

子供に遊びの体験を!



河崎教授の話に聞き入る参加者

河崎教授の話に聞き入る参加者

第16回

※ 河崎教授の主張のキーワードは、面白さを買うという今の子ども達の生活が、自分感覚を鈍らせる根源であるとのこと。面白さは、過不足長短のある現実の本物との格闘の中にこそありとのこと。講演後の職員との懇談ではダンゴムシの話や園長が、アヒルごっこをしたことの話で盛り上がった。教授は、びゅんびゅんごまの6個同時回しの名人であることも披露。巨大ゴマを職員が回したのも印象的。 ※ 村山教授の著書『子どもの攻撃性に潜むメッセージ』に衝撃を受け講演を依頼。少年Aの事件との関連ありか?の伏線。よい子であらねば、見捨てられてしまうのでないかという不安感が恐怖心となり暴発の背景ともなっている。しかも、そこには、匿名的で明確な意図なき病理的要素があることを指摘。 ※ 汐見先生は、池田小学校の事件をとりあげ、学校と地域のあり方を問いかげられた。懇談では、汐見先生の世界的視野での日本の教育論に職員一同感心させられた。(OECDの学力観、学力テスト)

つむじ風

▼徳山中央幼稚園が毎年こ小講堂を借りて、子育て講演会を開催している。今年度は、村山教授が講演者として参加した。村山教授は、八〇年代初期に全国で起きた校舎内での児童に対する反発や抵抗、理由不明で子供たちも健康的だったと強暴発する理由の一つである。それが九〇年代に入ると勢力を伸ばす子供を指摘した。



# 秋葉教授が「子供の健やかな成長を」 第20回 ●周南 ● 徳山中央幼の子育て講演会が20年

※ 2/5/10/15/20回と講演会の節目に来ていただいた。当時、大阪教育大学池田小学校の事件に心を痛めておられた

周南市長ケ丘三丁目徳山中央幼稚園(御手洗賢成園長と保護者会村山育子会長)の子育て講演会二十周年記念大会(新周南新聞社など後援)が十四日、久米小講堂で開かれ、秋葉英剛大教養大学教授が「子ども



第20回



講演する増山教授  
徳山中央幼

●周南 ●  
増山 早 大教授が「子育ての自立への出発点は幼児」

周南市長ケ丘の徳山中、久米小体育館で開かれ、秋葉英剛大教養大学教授が「子育ての自立への出発点は幼児」と題して講演した。増山早大教授は保護者会、園長、園児の代表として、増山早大教授が「子育ての自立への出発点は幼児」と題して講演した。増山早大教授は保護者会、園長、園児の代表として、増山早大教授が「子育ての自立への出発点は幼児」と題して講演した。

たちが健やかに育つ時代をつくらう」と題して話した。約三百人が聞き入り、秋葉教授は一昨年度まで、同大学副学長を務め、付属池田小事件を経験し、その後も子供たちの心のケアなどに関わっている。この日はまず御手洗園長が最近は大人の都合で子供の生活を作り上げていくと指摘し、「二十年を機にもう一度、立ち止まって考えてみたい」とあいさつ。村山会長は「子供は健やかな育ちとは何かを講演を通して考えてみてほしい」と呼びかけた。

秋葉教授は国立大学を卒業して就職してもすぐフリーターになる学生が増えている現状や学級崩壊などを例に、最近の子供は自己中心性が強くなっていると指摘。社会に交わる力を子供に植えつけるのが親の義務で、親が口だけでなく行動で子供の範にならなければならぬと訴えた。

※ 22回講演会にやっと来ていただいたという思いがあった。早稲田大学の学生たちとの竹林を守る運動や、竹に付着している白い粉に抗菌作用卵があるなど環境との共生という点でも大きなご示唆をいただいた。安心・自信・希望なのか、不安・不信・失望かの選択。冷たく、堅苦しく、あわただしく、でなく暖かく、柔らかく、ゆったりとした風に吹かれたい。そんな子育てで社会を育てたい!

つむじ風  
一人には危険地帯が四つあり、中でも最も危険なのは思春期という話を聞いたばかりなのに、相次ぐ思春期真っただ中の犯罪連続にリツ然となる。

徳山中央幼稚園の子育て講演会で早稲田大学の増山均教授の話があったのだが、光高で三年生が手製の爆発物を隣の教室に投げ込んで重軽傷者多数を出すと、重大事件の翌日たっただけに身にしまったものだった。

つむじ風  
徳山中央幼稚園の子育て講演会で早稲田大学の増山均教授の話があったのだが、光高で三年生が手製の爆発物を隣の教室に投げ込んで重軽傷者多数を出すと、重大事件の翌日たっただけに身にしまったものだった。

日やかされ、まじめでいい子で育った子供が、危険地帯の思春期に入っていく準備をする機会がないままだった例が少なくないのだから、その後、後には続いた事件も家庭内の問題が大きかったよう

つむじ風  
徳山中央幼稚園の子育て講演会で早稲田大学の増山均教授の話があったのだが、光高で三年生が手製の爆発物を隣の教室に投げ込んで重軽傷者多数を出すと、重大事件の翌日たっただけに身にしまったものだった。

※ 汐見先生2度目の2回連続

汐見先生が話した、今年「思春期を見通した子育て」と題して白梅学園大学学長の汐見幸さんが話したが、まず一九八三年(S58)生まれの十七歳たちが次々に凶悪犯罪を起こし、今回の秋葉原事件もその延長上にあると指摘した。

つむじ風  
徳山中央幼稚園の御手洗賢成園長から一年一回、連絡をいただく子育て講演会にその流れの早さを実感してきしたが、今回は第二十五回で四半世紀の歴史を刻んだのだから偉業と言っ





子育て講演会が30周年を迎えた  
 こと。国と家庭の協働によ  
 って子育てをしようとする一貫し  
 た姿勢に敬意を表します。

この30年間、社会の急激な変  
 化による子育て環境の劣化は  
 保育に当たる者にとって、最大の悩  
 みでした。この状況に対して、  
 積極的に学びの場を提供し、  
 保護者と共に子どもと環境を見  
 る目を磨いて来たことは、  
 教育機関としての幼稚園の鏡  
 とも言えることとです。

30周年を一つの区切りとして、更  
 に学びの輪を広げ、地域の子育  
 てセーフティとしての役割を一層活  
 発に果たせることを期待しています

第11回 広木 克行 先生

おりのまに  
 うを  
 輝  
 く  
 !!  
 尾木直樹

第14回 尾木 直樹 先生

子育て講演会、30周年、おめでとうございます。そして、ご苦労さま。

「学ぶことの唯一の証は、変わることである」と言った人がいますが、自分が「変わる」ことほど楽しいことはありません。人はそれを「発達」と言ったりするのでしょうが、そんな言葉では言い表せない「快感」が、「学ぶ」ことにはあるのです。

考えてみたら、子どもたちは毎日、なんの変哲もない日常を、楽しくて仕方ない生活へと「変化」させながら生きているのです。社会も、自分の人生も、ついつい「変わらない」と思って諦めてしまいがちな私たちに、子どもたちはいっぱいいろんなことを教えてくれますね。

生きることをおもしろがる親であり、保育者であり、人間でありたいものです。

山梨大学 加藤 繁美

第13/21回 加藤 繁美 先生

子育て講演会が30回を迎え  
 ました。おめでとうございます。  
 学びの輪を  
 日々の楽しい遊びが子どもの  
 健康と発達の土台を思えば  
 徳山中央幼稚園の子どもたち  
 が月命日などの企画として  
 生き、発達しているように  
 今後とも沢山の保育実践  
 を進めたいです。

2013年5月 河崎道夫

第16回 河崎 道夫 先生

お招きいただき、1日の中、想い出いっぱいです。  
園長先生、ご挨拶、想い出よく理解して支えて  
下さるスタッフの方々の様子も、心に残ります。  
益々、育つ子どもを育てていく問題が深刻化  
する中、一貫して想い出を子どもに伝えていく  
貴園の取組が、非常に貴重だと思っております。  
今後、ご下さい。又お会いしたいと思います。

第27回 小西 行郎 先生

子育て講演会30周年、お目出度うございます。  
インターネット技術の発達により、子どもたちの世界を  
大きく変化させています。子どもが生きる場所は地域  
です。地域の多様な人々の力に支えられることで  
子どもたちも安心して生きていくことができるのです。  
東日本大震災の経験はそのことを痛感しています。  
多くの子供が、徳山の地で子どもたちも普通に安  
心して生きていく世界をつくり出す上、子どもと講演会  
が、つなぐべき人の絆は、かけがえのないものと  
思います。今日の素晴らしい社会状況の中、その存在を  
大事にしてください。

中西 新太郎

第26回 中西 新太郎 先生



『子育て講演会』30周年おめでとうございます。  
長きにわたり子育て講演会を通して、地域の子ども  
たちを見守り続けてきた御手洗先生に、心から敬意  
を表します。このような志の高い講演会で2年連続で  
お話させていただき、たいへん光栄に  
思っております。  
私は今、「ことばキャンプ」というコミュニケーション  
育成活動をしています。児童養護施設にも訪問し、  
虐待で親と離れて暮らしている子どもたちと多く接し  
ていますが、どんな仕打ちをされようとも親をかばい、  
慕う健気な子どもたちを見ていて、子どもにとって  
親は最愛の存在、子どもは親が大好き！なのだ  
とつくづく思います。どうか子どもに負けないくらい、  
いっぱい愛してあげてほしい！  
そして少しずつ「親ルールからじぶんルールへ」  
自分で考え行動できるように、子どもを励ましなが  
ら自立を促してあげてくださいね！  
心豊かな子どもを育てる徳山中央幼稚園の  
ますますのご発展をお祈りしております。



NPO法人 JAMネットワーク  
高取しづか



第28回 高取しづか先生  
<http://www.takatori-shizuka.com/>

「どの時代にも、どの民族も、共通に大事にしてきたものはなあーに？」

- こう聞かれたらみなさんはどう答えるでしょうか。人類がその歴史全体を通じて普遍的に大事にしてきたものは何かということです。その答えの内容こそが、「混沌とし始めている現代社会で、私たちがあらためて大事にしなければならないことは何か」という問いを考えるときのヒントを与えてくれるに違いありません。
- 答えはさまざまにあり得るでしょうが、私は、その一つは間違いなく宗教だと思っています。宗教こそ、どの民族も、どの時代でも、人々が大事にし、それを豊かにし、それをよりどころにして生きてきた当のものだと思うのです。形はさまざまですが、宗教のない社会はないのです。
- 御手洗賢成さんは、その宗教の担い手で、仏教のお坊さんです。
- 私は、仏教に限らず、宗教の自覚的ですがぐれた担い手は、みな社会活動家だと思ってきました。釈迦にしても、イエスにしても、ムハンマドにしても、あるいは日蓮や親鸞にしても、みな人々の幸せのために懸命に活動してきた人物です。人々、特に、権力や金力をもたない庶民の、現世・来世の幸せを願って、いのちを削って活動してきた人たちです。
- 御手洗賢成さんは、現代の日本で宗教家としての自らの使命を全うするために、幼児教育家となる道を選びました。宗教は人々に唯一平等に与えられた「いのち」の営みを助け、「いのち」が輝くように援助するものですが、幼児教育もまた、子どもたち一人一人に平等に与えられたそれぞれの「いのち」の営みを活性化し、充実するように援助する営みです。
- 御手洗賢成さんは、そのため、一方で幼稚園の園長として子どもたちと直接に関わり、遊びという子どもたちの「いのち」を直接輝かせる営みを充実させるために努力してきましたが、あわせて、その子どもを産み育てている当事者である保護者の、子育てというこれまた人類が普遍的に累々と続けてきた営みを、現代社会において充実させるための援助を累々と続けてこられました。
- その成果のひとつが、とうとう30回目を迎えた徳山中央幼稚園主催の「子育て講演会」です。
- 大したものだと思います。一言で30回といいますが、かくも長く続けることは並大抵のことではありません。みなさんのご家庭で30年間毎年続けているものはありますか？とといわれたら、返答に困るのではないのでしょうか。
- その情熱は、御手洗賢成さんの宗教家=幼児教育家としての自覚がもたらしてくれたのだと思います。仏教寺院は、かつては、宗教的な儀式の場であるだけでなく、町や村の何でも相談所であり、祭りの拠点であり、学びや癒やしの場でした。町や村のいわば文化・教育・娯楽センターでした。その歴史的な寺院の機能を現代において引き継ぎたいとの願いが、「子育て講演会」として結実してきたのだと思います。講演会は、幼稚園を地域の子育てセンターとして機能させたいという宗教家御手洗賢成の願いの結実です。私は、こうした御手洗賢成さんの情熱に打たれて、これまでお手伝いさせていただきましたが、光栄なことだと感謝しています。
- これから、徳山中央幼稚園は、どういふ風にするか自らの使命を果たしていこうとするのか、私には強い興味があります。時代は一方で人口増問題、資源問題、環境問題など歴史にかつてなかった深刻な問題を一層深刻化させてしまう可能性があり、それとどう向き合うかが庶民の知恵として求められていますし、他方で、足下の問題としての深刻な少子高齢化社会の中で、孤独な高齢者を一人でもなくし、どの人も死ぬまで生き甲斐を持って生きることができるといつくるのかというような問題が蓄積してきます。高齢化社会問題を反転させますと育児困難問題になります。子どもがうんと少なくなるということは、子どもにとっては決してありがたいことではないのですが、地域の力を借りて子育てすることがきわめて困難になった現代社会では、子育て困難の最大の要因になります。
- そうした答えの簡単に見つからない問題群に囲まれるだろうこれからの社会だけれども、大丈夫、みんなでワイワイ知恵を出し合っていけば何とかかなりますよ、私がおのワイワイの機会をつくりましますし、場も提供します、相談にも応じます、みんなでがんばりましょう、というのが、御手洗賢成さんのスタンスではないかと推察しています。こういう人がいるから、社会は壊れないで、綿々と続いてきたのだと、あらためて思いを強くします。
- 御手洗園長は、きっとこうしたことも考えて、徳山中央幼稚園を、地域の、文字通り中核的な、お年寄りも集いあう、文化・教育・娯楽センターとして、発展させていこうと思っています。楽しみです。
- 頑張れ！賢成。応援しています。

第7回・12回・17回・18回・24回・25回・30回 東京大学名誉教授・白梅学園大学学長

汐見 稔幸

## いじめとあそびの境目にあるもの

2013 3/6

園長 御手洗賢成

■ 最近、大津のいじめ自殺・大阪の体罰自殺・日本代表女子柔道の監督暴力など子どもや大人を取り巻くまたかと思わせる事案が表出しています。これは、幼児期には関係がないと見るには軽率ですが直結して考えるには短絡過ぎます。冷静に、思慮深く立ち止まって考えることが重要です。何故なら、この問題は今に始まったことではない長い伏線をもちつつなおざりにされてきた古くて新しい問題だからです。

■ 今回のいじめ自殺問題は、もう既に調査委員会の報告書が出ています。一番の注目すべき点は、いじめと自殺の因果関係を明確にしたということです。

それは、80年代から引き起こされている一連のいじめ事件が、“あそびなのかいじめなのか”の境目が分かりづらいということで具体的調査を避け続けたことで、注目を浴びているのです。ここではっきりしておくべき第1は、『あそび』であれ『いじめ』であれ『いじり』、『冷やか』、『からかい』であっても、投げかける側の意識がどうであれ、その言動と行動が当事者にとって深刻な苦痛である場合は、いじめであると判断すべきだということであり、許されないことだということです。この点は、最終報告書も述べているところです。第2には、この『あそび的いじめ』には、他者の痛がる、困る、悲しむ、悩む姿を見てさらに追い込み且つ、それをゲームのように楽しむ感覚があるということです。これは、病理的なサディズムであり深刻な事態が蔓延していることをも示しています。記憶に新しい1997年の少年A(神戸の事件)の事件は、被害少年の首を切り落とし、その血を見て異常な性的興奮をおぼえたという報告が成されています。何がそうさせるのでしょうか。皆さん立ち止まって考えてみて下さい。

■ 下記に示した、対比はこの間の一連の事件の中にある境目論争の視点です。この中に、共通する1つ目は、力の強い方が弱い方に向かって、一方的『脅威』を行使するという構造だと

いじめ	か	あそび	か
虐待	か	しつけ	か
体罰	か	指導	か
暴力	か	愛の鞭	か
セハラ	か	スリッパ	か
殺人	か	記憶	か
戦争	か	抑止力	か

いうことです。2つ目は、セクハラの場合で見ると、行為をした側(肩を叩く)の思いは別にして、受けた側が左側だと感じる人と右側だと感じる人がいるということです。3つ目は、行為をした側には左側の意識はあまりなくあくまでも右側の意識しかない場合が多いという事実です。4つには、身体で行使する行為はええとして『言葉の喪失』を伴うということです。そこには、『何故そうなるのかを、指導する側も受ける側も考える』ということを放

棄する関係をよしとし、尚且つそのことで相手が育つと錯覚する傲慢さしか残らないということです。人類の歴史は、相手を威嚇で支配する関係から抜け出そうとする模索の連続でした。しかしながら、地球上には自分の国に従わない人や国を、悪の枢軸と意味付け国連組織を形骸化しかねない大国のあることを忘れてはなりません。力で、相手をねじ伏せようとするいたらなさを常に孕みつつ生きている私であるという自覚に立ち、『対話的關係づくり』こそが未来を切り開く希望であるとの境界線に立ち、悩み生き抜く子どもを育みたいものです。対話的とは、力を用いずとも互いの違いのままに相互が主体として尊重され折り合いをつけられる関係です。

未来という

希望の光を育む 微笑に充ちた

風 薫る 社会を!



活動なくして 発達なし

集団なくして 発達なし

教育なくして 発達なし



2013・6